



自己の将来としての高齢者と他者としての高齢者の生活イメージの比較

竹内, 真純
片桐, 恵子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 14(2):31-40

(Issue Date)

2021-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012652>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012652>



自己の将来としての高齢者と他者としての高齢者の生活イメージの比較

Comparison of the Image of the Elderly as Our Own Future and That of the Elderly as Others

竹内 真純* 片桐 恵子**

Masumi TAKEUCHI* Keiko KATAGIRI**

要約：高齢者に対する否定的な態度「エイジズム」には、他の偏見とは異なり、高齢者には誰もがいづれなるという大きな特徴がある。先行研究では、高齢者を将来の自己として見ることで、単なる外集団として見る時とは異なる心理的效果が生じることがわかっている。しかし、そもそも自己の将来としての高齢者と、他者としての高齢者がそれぞれどのようにイメージされているのか、そのイメージが異なるのかは明らかになっていない。本研究では、高齢者の日常生活についての自由記述を質的分析し、将来の自己として想像される高齢者イメージと、一般的な他者として想像される高齢者イメージを比較した。分析の結果、自己の高齢期の場合も一般の高齢者の場合も、高齢者の生活として「積極的活動」「平静的活動」「対人交流」「健康行動」「否定的」の5カテゴリが見出された。また、回答のパターンとして、自己の高齢期については、積極的活動と対人交流が多い「アクティブ群」、平静的活動が多い「非アクティブ群」、否定的記述が多い「ネガティブ群」の3群が、一般の高齢者については「アクティブ群」と「非アクティブ群」の2群が見出された。自己の高齢期は基本的にポジティブにイメージされていたが、ネガティブ群に見られるような老いに対する不安を表す人も存在することが示された。

キーワード：高齢者イメージ、エイジズム、自己の高齢期、一般的な高齢者、自由記述

1. 研究の背景と目的

我が国は世界有数の長寿国であり、2019年の平均寿命は男性81.4歳、女性87.5歳と過去最高を記録した（厚生労働省、2020）。健康寿命（日常生活に支障のない期間）は、2016年時点で男性が72.1年、女性が74.8年と、やはり過去最高を記録しており（内閣府、2020）、多くの人が高齢期を長く楽しむことが期待される。

しかし、現代の社会には高齢者や高齢期に対する否定的な差別・偏見が存在し、高齢者にとって必ずしも幸せな環境ではないことが指摘されている。このような差別や偏見は「エイジズム」と呼ばれ（Butler, 1969）、レイシズム（人種差別）・セクシズム（性差別）と並ぶ「第3のイズム」として、最も広く蔓延している差別・偏見の1つと考えられている。Palmore（1999）は、否定的なエイジズムの例として、高齢者は、病気、性的不能、醜さ、精神的衰え、精神病、役立たず、孤立、貧困、鬱、といったネガティブなステレオタイプで見られ、高齢期は人生において最悪の年代と見なされると述べている。

エイジズムの実態として代表的なものに労働の場や介護の場における差別がある。仕事上のパフォーマンスは加齢によって低下しなことが多くの研究で示されているにも関わらず（Liden, Stilwell, & Ferris, 1996）、高齢の求職者は若い求職者よりも低く評価されたり（Abrams, Swift, & Drury, 2016）、高齢者の仕事上のミスは他の世

代のミスよりも厳しい処分を求められることがわかっている（Rupp, Vodanovich, & Credé, 2006）。また、高齢者に対して否定的なイメージを持つ人ほど、就労における年齢格差の原因を高齢者本人の能力や努力不足に帰属し、就労格差を是正するための政策に反対することが示されている（竹内・唐沢, 2008）。さらに、介護の場では、高齢者に対して赤ちゃんに対して話すような言葉遣いで接する（Caporael, 1981）。心理学においては、高齢者に対する態度と若い人に対する態度を比較した研究が数多く行われており、メタ分析の結果、高齢者は若い人よりもネガティブに見られることが示されている（Kite, Stockdale, Whitley, & Johnson, 2005）。

高齢者イメージ

エイジズムに関する研究として、高齢者イメージ、高齢者ステレオタイプの研究は数多く行われている。ここで、ステレオタイプとは、特定の集団成員に対する定型化したイメージのことであり、例えば「高齢者は頑固だ」などのイメージがこれに当たる。ステレオタイプは必ずしも否定的なものとは限らず、「女性は優しい」「高齢者は知恵がある」といった肯定的な内容も含まれる（Palmore, 1999）。ステレオタイプは、対象集団の構成員（「女性」や「高齢者」）全てに当てはまるわけではないにも関わらず、対象集団の構成員を見ると自動的に活性化することがわかっており（Devine, 1989）、対象集団の

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員

(2020年9月30日 受付)
(2020年12月4日 受理)

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

構成員に対する画一的な判断につながりやすい。例えば、「女性は料理が好きだ」というステレオタイプについて、当てはまる女性もいれば、当てはまらない女性も存在する。しかし、ステレオタイプの判断がなされると、全ての女性に対して、料理が好きだろうという判断がされるのである。

Fiske, Cuddy, Glick, & Xu (2002) は、様々な集団に対するステレオタイプの内容と、集団の地位や関係性との関連を調べたステレオタイプ内容モデルを提案し、様々な集団のステレオタイプは「温かさ」と「有能さ」の2軸で表されると主張した。このモデルにおいて、高齢者ステレオタイプは「無能」で「温かい」ステレオタイプと位置づけられた。これは低地位で競争的でない集団に対して保有されるステレオタイプであり、主婦や知的障害者に対するステレオタイプと共通する (Cuddy & Fiske, 2002)。

高齢者イメージのより詳細な内容については、形容詞対を用いたセマンティック・ディファレンシャル法 (SD 法) によって測定する研究が多く行われている (Rosencranz & McNevin, 1969 など)。保坂・柚井 (1988) は、大学生の高齢者イメージを SD 法によって測定し、活動性・自立性、温和性、有能性、幸福性、協調性、社会的外交性という6つの因子を抽出した。そして、大学生の高齢者イメージは、活動性・自立性が低く (静的、暇そう、非生産的など)、温和性が高く (やさしい、愛らしいなど)、有能性が中くらいで (優れた、有能な、高尚ななど)、幸福性が低く (灰色、不幸など)、協調性が低く (主観的、強情など)、社会的外交性が低い (消極的、閉鎖的など) イメージであることを明らかにした。この結果は、大学生の持つ高齢者イメージが比較的にネガティブなものであることを示している。しかし、大塚・正野・日浦・白井 (1999) の行った、看護学生を対象とした同様の調査では、学生の持つ高齢者イメージとして「暖かい」「尊敬できる」「思いやりがある」等の項目の得点が高く、全体的にポジティブなイメージが持たれていた。このように、大学生が持つ高齢者イメージについては質問項目や測定の仕方によって結果が異なり、一貫した結果は得られていない。

高齢者イメージを単一のものではなく、多様なサブタイプを含むものとしてとらえた研究もある。Brewer, Dull, and Lui (1981) は、大学生に高齢者の写真を分類してもらい、それぞれの分類に合わせた特性語を示してもらうことで、高齢者には、祖母 (家庭志向の女性)、高齢の政治家 (著名で保守的な男性)、非活動的な孤立した高齢者、という3つのサブタイプがあることを明らかにした。また、Hummert (1990) は、高齢者に関わる特性語の分類によって、高齢者のサブタイプとして、ポジティブな3タイプ (完璧な祖父母、リベラルな家長、保守派) とネガティブな7タイプ (世捨て人、重度の障害、脆弱な人、がみがみ屋、憂鬱な人、頑固、自己中心的) があることを明らかにした。Schmidt and Boland (1986) の研究でも、Hummert と類似したサブタイプが見出されている。

自分が高齢者になるというエイジズムの特徴

エイジズムには、人種や性別は基本的に変わらないのに対し、高齢者には誰もがいずれなるという大きな特徴がある。他の多くの偏見の場合、偏見を持つ側 (レイシズムで言えば白人) は偏見を持たれる側 (レイシズムで言えば有色人種) になることはない。しかし、エイジズムについては、偏見を持つ側 (若い世代) が年を取って偏見を持たれる側 (高齢者) になることがわかっている。若い世代にとっ

て、高齢者とは外集団であると同時に、自分の将来の姿でもあるのである。

このようなエイジズムの特徴に注目した研究として、2つの議論の流れがある。1つは、若い頃のエイジズムが高齢期の適応に与える影響を検討した議論、もう1つは、自分が高齢者になるという特徴がエイジズムの発生に影響するとする議論である。

第1の、エイジズムが高齢期の適応に与える影響を議論した理論は、ステレオタイプ・エンボディメント理論である (Levy, 2009)。この理論は、人が若い頃に外集団に対するものとして無抵抗に保持してきたエイジズムが、年を取って高齢者になったときにネガティブな自己認知となり、本人の健康状態や行動にネガティブな影響を与えようとする理論である。この理論に基づいた先行研究は多く行われており、38年間の追跡調査の結果から、若い時にネガティブな高齢者イメージを持っていた人ほど高齢期の健康状態が悪く、健康行動をせず、寿命が短いこと (Levy, Zonderman, Martin, Slade, & Ferrucci, 2009)、加齢に伴う記憶力の低下が大きいこと (Levy, Zonderman, Slade, & Ferrucci, 2011) 等が明らかになっている。これらの結果は、若者の持つ高齢者イメージを研究することの社会的意義を示すものと言える。

第2の、自分がいずれ高齢者になるという特徴がエイジズムの発生に影響するとする議論には、以下に記すように、存在脅威管理理論と、社会的アイデンティティ理論がある。

Martens, Greenberg, Schimel, and Landau (2004) は、「人はいつか必ず死ぬ」という死すべき運命の不可避性が人々に脅威を与え、その脅威が人々の心理や行動に様々な影響を与えると論じた存在脅威管理理論 (Greenberg, Pyszczynski & Solomon, 1986) に基づき、自分がいつか老いて死ぬという脅威がエイジズムを引き起こすと主張した。大学生を対象とした実験の結果、高齢者の写真を見ることで「死」の概念が活性化すること、自己の死について記述する課題を行った参加者は、そのような課題を行わない統制群に比べて、その後に測定した高齢者に対する態度が否定的であることを明らかにした。この結果は、高齢者は人に「死」を連想させる存在であるため、人は現在の自己と高齢者を差異化して老いと死の脅威を減らそうとし、エイジズムが生じると解釈された。

一方、Packer and Chasteen (2006) は、人は自分が所属する集団から社会的アイデンティティを得ており、自分の社会的アイデンティティを高めるよう動機づけられているとする、社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1986) に基づいて、大学生を対象とした実験を行った。具体的には、70歳になった自分の生活を想像して記述する課題を行った参加者と、統制群 (1年後の自分の生活を想像して記述する課題を行った) で、その後に測定した高齢者に対する態度を比較した。その結果、あらかじめ測定していた若者集団への同一視 (自分が若者という年齢集団に属していることに対する愛着や評価) が強い人では、高齢者になった自分を想像した後のほうが高齢者に対する態度が否定的だったのに対し、若者集団への同一視が弱い人では、高齢者になった自分を想像した後のほうが高齢者に対する態度が肯定的であった。この結果は、若者集団同一視が強い人にとっては、高齢者になった自分を想像することは現在の社会的アイデンティティを脅かすものであるため、その脅威への対処としてエイジズムを強めたのに対し、若者集団同一視が弱い人にとって

は、高齢者になった自分を想像することは脅威ではなく、むしろ将来の自分の社会的アイデンティティを高く維持するためにエイジズムを弱めたと解釈された。この結果は、将来の自己として高齢者を見た場合に、単なる外集団として高齢者を見たときよりも、エイジズムが強くなる場合と、弱くなる場合の両方があることを示している。

さらに、高齢者に対する態度を検討した研究ではないが、Robinson and Ryff (1999) の研究では、人は自分の将来を現在や過去よりも幸せだと考えやすいことがわかっており、他者として高齢者を見たときと比べて、自己の将来として高齢者を見た際には、よりポジティブなイメージが持たれることが予測される。

これらの研究は、自分が将来なる存在として高齢者を見ることで、単なる外集団として高齢者を見るときは異なる心理的影響が生じることを示すものである。研究によって結果が異なるが、将来の自己の姿として高齢者を見ることにより、単なる外集団として高齢者を見たときと比べて、エイジズムが強くなったり、弱くなったりするという影響を受けることが示されている。

しかし、これらの研究においては、そもそも「将来の自己」としての高齢者と、「他者」としての高齢者の姿が、それぞれどのようにイメージされているのか、そのイメージが異なるのかは明らかになっていない。Packer and Chasteen (2006) の実験では、70 歳になった自分の生活を想像して記述するという課題が行われたが、この記述内容については分析されておらず、どのような記述がなされていたのか不明である。しかし、将来の自己として高齢者を見たときの心理的影響を議論するにあたって、具体的にどのようなイメージが持たれているのか、他者として高齢者をみたときのイメージとどのように違うのかが明らかでなければ、抽象的な概念の上で議論を組み立てるにすぎず、具体的な現象を理解するのは困難である。

この点に関して、将来の自己としての高齢者イメージと、一般的な高齢者イメージの両方を研究した数少ない先行研究として、高橋の研究 (2007, 2012, 2013) がある。高橋 (2007) は、高齢者に対する考え方を測定する老年観スケール (馬場・中野・冷水・中谷, 1993) を用いて、大学生の持つ一般的な高齢者イメージと、将来自分が高齢者になったときのイメージを比較した。その結果、一般的な高齢者イメージも自己の高齢期のイメージも、いずれもネガティブなものである点で共通していたが、自己の高齢期のイメージは一般の高齢者イメージに比べて、「自分を不幸だと思っている」「子供や孫の迷惑になっている」のような、日常生活や対人関係に対する不安が多く表れているという特徴があった。さらに、一般的な老人イメージ (高橋, 2012) と、将来自分が老人になったときのイメージ (高橋, 2013) のそれぞれについて、形容詞対を用いた SD 法と自由記述の 2 つの方法で測定し、自由記述で記載された高齢者イメージが SD 法で測定された高齢者イメージを反映していること、自分が高齢者になったときのイメージは活動性と人間関係に富んだポジティブなものであることを明らかにした。しかしこの研究では、一般的な老人イメージ、自己の将来としての老人イメージはそれぞれ個別の研究として行われており、自由記述での測定において質問の仕方も異なり、内容の比較ができなかった。具体的には、一般的な老人イメージは「あなたから見た『老人』はどのような人たちですか」と質問していたのに対し、自己の将来としての高齢者イメージは「あ

なたが『老人』と呼ばれるようになった時のことを想像してください。どのような「老人」になっていると思いますか」と質問しており、一般的な老人イメージでは「腰」「曲がる」などの外見的特徴や「優しい」「かわいい」といった内面についての記述が、自己の将来としての老人イメージでは「生活」「趣味」「歩く」などの日常生活における行動の記述が多くなっていた。

本研究の目的

そこで、本研究では、大学生が持つ高齢者イメージについて、自己の将来として高齢者を考えた場合と、他者として一般的な高齢者を考えた場合で内容的に異なるのかを比較する。研究に際しては、両条件間の記述内容を比較するため、心理学的実験の手法を用いた。具体的には、実験参加者に 2 つの条件のいずれかをランダムに割り当てる無作為割り当てを行い、質問文においてイメージする対象 (高齢者になった自分／一般的な高齢者) 以外の記述は全て同じになるよう統制した。

また、質問方法としては、高橋 (2013) の自己の将来としての高齢者イメージと同様、日常生活における行動の記述を求めるものとした。理由は、第 1 に、自己の高齢期をイメージするにあたって、抽象的な形容詞によるイメージの記述や内面のイメージをするのは困難だと考えられるため、第 2 に、日常生活における具体的な行動の記述は注目に値すると考えたためである。先行研究では SD 法による高齢者イメージの測定が多く行われてきたが、SD 法による測定ではあらかじめ用意した項目についてしか検討できず、また抽象的な形容詞として現れるイメージしか明らかにすることはできない。しかし、現実の生活において高齢者をイメージする際は、より日常的な行動に根付いて印象が形成されと考えられる。高齢者の理解という意味では、単に「温かい」や「無能」というイメージではなく、高齢者がどのような日常生活を送っているかを具体的に理解することが真の高齢者理解につながると考えた。

よって、本研究では、大学生が想像する高齢者の日常生活を分析し、どのような生活が想像されているのか、また、自己の将来として高齢者を想像した場合と、他者としての高齢者を想像した場合とで、想像した内容が異なるかを比較することを目的とする。

2. 方法

参加者

東京都内の大学に所属する大学生 79 人 (男性 31 人、女性 47 人、不明 1 人) が調査に参加した。参加者の年齢は 18-29 歳 ($M=19.74$, $SD=1.33$) であった。調査は授業時間後に教室にて「年齢イメージ課題」と題した質問紙によって行われた。この質問紙は、本研究で用いる項目の他、若者集団への同一視や死に対する不安についての質問を含んだ。調査への参加は任意であることを説明し、書面による同意を得た。調査終了後、参加者にはデブリーフィングとして調査の目的を説明した。本調査は、神戸大学人間発達環境学研究所の倫理審査委員会によって承認された。

高齢者の生活の想像

参加者の半数 ($n=40$) は自己の高齢期についての生活イメージを、半数 ($n=39$) は一般的な高齢者の生活イメージを記述する課題を行った。いずれの記述を行うかはランダムに決められた。自己の高齢期についての生活イメージを記述する課題は、次のような質問に

対して、自由記述にて回答を求めるものであった。

「未来には、良いこと悪いこと、様々なことが起きる可能性があります。最初の課題では、ご自分の将来について深く考えていただきます。

自分が70歳になったときのことを想像してください。課題は、その時のあなたの生活がどのようなものであるか、記述していただくものです。実際に、自分が70歳になった立場に身をおいて、その時の生活がどのようなものか理解するように試みてください。どんなことをしているか？どのように感じているか？どのようなことを考えているか？一日の過ごし方を想像して、できるだけ具体的に記述してください。」

一般的な高齢者の生活イメージを記述する課題では、次のような質問に対して、自由記述にて回答を求めた。

「世の中には、様々な立場、様々な年齢の人がいます。この課題では、数分間、様々な年代での生活について深く考えていただきます。

自分と同じ性別の、70歳の人を想像してください。課題は、その人の生活がどのようなものであるか、記述していただくものです。典型的な70歳の人の生活がどのようなものか理解するように試みてください。どんなことをしているでしょうか？どのように感じているでしょうか？どのようなことを考えているでしょうか？一日の過ごし方を想像して、できるだけ具体的に記述してください。」

これらの質問において、想像する生活を「70歳」としたのは、健康を維持した高齢者の生活として「70歳」が適切だと考えたためである。世界保健機関（WHO）の定義では高齢者は65歳以上とされるが、内閣府が60歳以上の男女を対象に行った「平成26年度 高齢者の日常生活に関する意識調査」では、70歳以上を高齢者と考えるという回答が最も多かった（内閣府, 2015）。一方、75歳以上は後期高齢者となり、身体機能を損なう人が増加する（Akiyama, Sugawara, Takeuchi, & Kobayashi, 2008）。そのため、多くの人が健康を維持した高齢者として思い浮かべるのに、70歳の年齢が最も適切だと考えた。

その他の尺度への回答

高齢者との同居経験、高齢者との接触頻度、性別、年齢、について回答した。

3. 結果と考察

参加者の特性

自己の高齢期について記述した人は、男性16人（41.0%）女性23人（59.0%）、高齢者との同居経験のある人は18人（46.2%）ない人は21人（53.8%）だった。一般的な高齢者について記述した人は、男性15人（38.5%）女性24人（61.5%）、高齢者との同居経験のある人は14人（35.9%）ない人は25人（64.1%）だった。高齢者との接触頻度は表1のとおりで、年に数回程度高齢者と接する人が最も多かった。

記述内容のカテゴリ化

記述内容には、「何時に何をやる」という形で時間軸に沿って一日の行動の流れを記述したもの、比較的長文の文章での回答、単語での回答、時間軸と文章を併用したものなどが混在していた。そのため、記述内容から、名詞や行動、状態を表す単語を抽出した。例えば「6時起床、7時散歩がてら朝食、8時帰宅、8時半家事、9～11時ドラマ、

表1 参加者の高齢者との接触頻度

	自己の高齢期	一般の高齢者
8 ほぼ毎日	5 (13.2)	3 (7.7)
7	4 (10.5)	3 (7.7)
6 週に1回程度	7 (18.4)	4 (10.3)
5	4 (10.5)	1 (2.6)
4 月に1回程度	4 (10.5)	6 (15.4)
3	2 (5.3)	4 (10.3)
2 年に数回程度	11 (28.9)	13 (33.3)
1 全くない	1 (2.6)	5 (12.8)

3, 5, 7にはラベルはついておらず、それぞれのラベルの中間を意味していた。

12時昼食、1～3時友達と話す、4時笑点を見る、5～6時夕飯、7～8時孫と遊ぶ、9時お風呂、10時就寝」という回答からは、「散歩」「朝食」「家事」「ドラマ」「友達と話す」「笑点」「夕飯」「孫」「風呂」「寝る」の10単語を抽出した。また、「毎日朝早く起きて散歩に出かける。昼間は夫とともに家で過ごしたり、たまに出かける。自分の子どもが孫を連れて遊びに来る」という回答からは、「早起き」「散歩」「夫」「家で過ごす」「出かける」「子ども」「孫」という7語を抽出した。「一日中つまらなそう」という回答からは、「つまらない」の1語を抽出した。

抽出された単語数を比較すると、一般的な高齢者についての記述で抽出された語は全部で59語、自己の高齢期については全部で69語であった。自己の高齢期を想像した際は、他者として一般的な高齢者を想像した際よりも使用された語が多く、多様な行動がイメージされたと考えられる。

次に、抽出した単語を内容的に類似したものごとに分類した。分析においては、人間発達環境学を専攻する2名の分析協力者と協議し、分析の妥当性を確保するよう努めた。また、質的分析の専門家1名にスーパーバイズを受けた。主分析者および分析協力者2名の分類の一致率は84.2%であった。不一致であった単語については、単語に分類する前の記述内容全体を読み直し、適切なカテゴリを決定した。

その結果、記述内容は19の小カテゴリと5の大カテゴリに分類された(表2)。大カテゴリは「積極的活動」「平静的活動」「対人交流」「健康行動」「否定的」の5つであった。以下に、各カテゴリの内容を詳述する。

第1に、「趣味」「仕事」「外出」「好きなこと（やる）」についての記述を、積極的に自分の好きなことや生産的活動を行う記述であるため「積極的活動」とカテゴリ化した。このうち、「趣味」には「趣味」という語だけでなく、「ピアノ」や「ゴルフ」のような具体的な趣味内容を表す語を含む。また「仕事」には「ボランティア」も含めた（出現は1回）。このカテゴリは「趣味」の出現が最も多く、高齢者の積極的な行動としてイメージされるのは主に趣味であることが示された。

第2に、「テレビ・新聞」「散歩」「昼寝」「のんびり」「お茶・休憩」「家（に）いる」の語を、活動的でない静かな行動を表す記述であるため「平静的活動」とカテゴリ化した。このうち、「のんびり」には「ゆっくり」「ゆったり」等の類語を含む。また、「テレビ・新聞」は「テレビ」と「新聞」

の語を含むが、「テレビ」が25回、「新聞」が2回と、テレビについての記述がほとんどだった。「平静的活動」カテゴリは「テレビ・新聞」「散歩」「昼寝」について記述が多く、高齢者の静かでのんびりとした活動が多くの人にイメージされていることが見て取れた。分類にあたって、「散歩」は第4カテゴリである健康行動ではないかとの議論が生じた。しかし、記述内容全体を見ると「ゆったりと過ごす。涼しくなったら散歩する」「犬と遊ぶ、散歩してみる」等、健康維持を意識した行動というより、日常の穏やかな生活の一環としての記述が多かったため、「平静的活動」に分類した。

第3に、「近所の人」「子」「孫」「友人」「家族」の語を、対人的な交流を表す語であるため、「対人交流」とカテゴリ化した。このうち「家族」には、「家族」の語が1回、「夫」の語が4回含まれた。記述の中に「妻」の語は出現せず、女性は配偶者について言及するのに対し、男性は言及しないという特徴が指摘できた。

第4に、「早寝早起き」「健康」「運動」の語は、意識的に健康を志す行動を表す語として、「健康行動」と分類した。このうち「健康」には「健康で暮らす」という記述と「健康に気をつけた食生活」などの記述を含む。

第5に、「病気」「死」「体が痛い」などの身体の不調を表す語、「つまらない」「退屈」「何をすればいいかわからない」のような心理的な暗さを表す語が見られた。これらは高齢期に対する否定的なイメージを表す語として「否定的」とカテゴリ化した。これらの語は各単語の出現頻度は少なかったが、日常の行動を表した他のカテゴリとは異なり、ネガティブな価値を含むという点で特徴的であった。自己の高齢期についても、一般的な高齢者についても、1割程度の回答者がこのような否定的な記述を行っていた。なお、「死」という記述は自己の高齢期における1名のみで見られた。高齢者は死を連想させる存在であるという存在脅威管理理論の議論とは異なり、自分が高齢者になることは必ずしも死を連想させないことが指摘できる。しかし、これは今回の研究でイメージしたのが70歳の高齢者であり、平均寿命から考えても死を連想させる存在ではなかったためだと考えられ、より年齢の高い高齢者をイメージした際には異なる結果が得られる可能性もある。

自己の高齢期と一般的な高齢者の記述における内容の違い

次に、自己の高齢期を想像した場合と一般的な高齢者を想像した場合で、各カテゴリの出現頻度が異なるかを調べるため、Fisherの直接確率検定を行った（表2）。

その結果、自己の高齢期を想像した場合のほうが、一般的な高齢者を想像した場合より、「子・孫」についての記述が有意に多く、「家にいる」という記述が10%水準で多い傾向があった。これらの記述は一般的な高齢者を想像した際には1つもないことが特徴的であった。特に、孫との交流の記述は自己の高齢期の記述では8回出現し、趣味・テレビ・昼寝に次ぐ頻出語であるのに対し、一般的な高齢者の記述では1度も出現していないのは注目に値する。自分の将来を考えた際は家で孫や子と交流する姿が想像されるのに対し、他者として高齢者を想像する際には子や孫との交流は想定されず、近所の人や友人との交流が主な社会関係として想像されるようである。先行研究で見られた高齢者のサブタイプ（Hummert, 1990; Schmidt & Boland, 1986）で言えば、自己の将来は「完璧な祖父母」という代表

的なポジティブなサブタイプで想像されるのに対し、他者として的高齢者はそのようなサブタイプでは想像されていないことがうかがえる。

表2 記述内容のカテゴリ分けと、自己の高齢期と一般的高齢者の比較

	全体 n = 79	自己の高齢期 n = 40	一般高齢者 n = 39	p 値
積極的活動	39 (49.4)	23 (57.5)	16 (41.0)	.179
趣味	30 (38.0)	17 (42.5)	13 (33.3)	.489
仕事	6 (7.6)	4 (10.0)	2 (5.1)	.675
外出	6 (7.6)	4 (10.0)	2 (5.1)	.675
好きなこと	5 (6.3)	4 (10.0)	1 (2.6)	.359
平静的活動	53 (67.1)	28 (70.0)	25 (64.1)	.637
テレビ・新聞	27 (34.2)	11 (27.5)	16 (41.0)	.241
散歩	22 (27.8)	8 (20.0)	14 (35.9)	.137
昼寝	16 (20.3)	9 (22.5)	7 (17.9)	.781
のんびり	8 (10.1)	5 (12.5)	3 (7.7)	.712
お茶・休憩	6 (7.6)	2 (5.0)	4 (10.3)	.432
家（に）いる	5 (6.3)	5 (12.5)	0 (0.0)	.055 †
対人交流	25 (31.6)	15 (37.5)	10 (25.6)	.335
近所の人	9 (11.4)	3 (7.5)	6 (15.4)	.154
子・孫	8 (10.1)	8 (20.0)	0 (0.0)	.005 *
友人	7 (8.9)	3 (7.5)	4 (10.3)	.712
家族	5 (6.3)	3 (7.5)	2 (5.1)	1.000
健康行動	18 (22.8)	6 (15.0)	12 (30.8)	.114
早寝早起き	13 (16.5)	4 (10.0)	9 (23.1)	.139
健康	5 (6.3)	2 (5.0)	3 (7.7)	.675
運動	4 (5.1)	1 (2.5)	3 (7.7)	.359
否定的	11 (13.9)	6 (15.0)	5 (12.8)	1.000
身体の不調	7 (8.9)	4 (10.0)	3 (7.7)	1.000
心理的暗さ	6 (7.6)	3 (7.5)	3 (7.7)	1.000

† p<.10, * p<.05, ** p<.01

性別・高齢者との同居経験・接触頻度による記述内容の違い

次に、性別、高齢者との同居経験、高齢者との接触頻度によって各カテゴリの記述頻度が異なるかを検討した。

まず、性別によって各カテゴリの出現頻度が異なるかを調べるため、Fisherの直接確率検定を行った（表3）。その結果、対人交流について、自己の高齢期、一般的な高齢者のいずれの場合でも女性が男性よりも多く記述していた。具体的には、女性の場合、自己の高齢期では56.5%、一般的な高齢者では37.5%が対人交流について記述していたのに対し、男性では自己の高齢期で12.5%、一般的な高齢者で6.7%と記述が少なかった。

男性高齢者の対人交流の少なさは多くの先行研究において指摘される問題である（小林・深谷, 2015, 齊藤・冷水・山口・武居, 2009など）。大学生の想像においても、男性は高齢期に他者と交流する姿を描写しないことが明らかになった。これは男性自身が対人交流に重きを置かないためだと考えられる。しかし、高齢期の対人交流はサクセスフル・エイジングの重要な1要素であり（Rowe & Kahn, 1997）、多くの研究でその利点が指摘されている（Menkin, Robles, Gruenewald, Tanner, & Seeman, 2017）。ステレオタイプ・エンボディメント理論が述べたように、若い時の高齢者イメージが自己成就予言となって高齢期に実現されやすくとすれば、男性が若い頃から高齢期の対人交流をイメージできるようなロールモデルの提示

が望まれる。

表3 性別による各カテゴリの出現頻度の違い

	男性		女性		p 値
	自己の高齢期				
積極的活動	7	(43.8)	16	(69.6)	.185
平靜的活動	9	(56.3)	18	(78.3)	.174
対人交流	2	(12.5)	13	(56.5)	.008 **
健康行動	1	(6.3)	5	(21.7)	.370
否定的	4	(25.0)	2	(8.7)	.205
	一般の高齢者				
積極的活動	5	(33.3)	11	(45.8)	.517
平靜的活動	9	(60.0)	16	(66.7)	.740
対人交流	1	(6.7)	9	(37.5)	.057 †
健康行動	3	(20.0)	9	(37.5)	.305
否定的	1	(6.7)	4	(16.7)	.631

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

次に、高齢者との同居経験によって各カテゴリの出現頻度が異なるかを調べるため、Fisherの直接確率検定を行った（表4）。その結果、一般的な高齢者の記述において、同居経験のある人のほうが積極的活動を有意に多く記述していた。これは、現実には70歳の高齢者が活動的な生活をしており、同居経験者ほどその実態を知っているためだと考えられる。内閣府が平成26年度に行った「高齢者の日常生活に関する意識調査」によれば、普段の生活で楽しいと感じていることについて、70歳代前半では49.8%の人が「友人との交流」、43.7%の人が「旅行」と回答しており、また外出頻度についても「ほとんど毎日」外出する人が40.8%、週に2、3日以上外出する人を合わせると9割近くに上るなど、70歳代前半の高齢者が活動的な生活を楽しんでいることが見て取れる（内閣府, 2015）。一般的な高齢者の生活を想像する際は、このような高齢者の実情についての知識が記述に反映されたと考えられる。一方、自己の高齢期について想像した際は、高齢者との同居経験の影響はなく、同居経験のない人でも6割以上が積極的活動を記述していた。これは、高齢期になっても現在の自己の延長として、現在と同様に趣味等の活動にいそむ姿が想像されたのだと考えられる。

表4 高齢者との同居経験による各カテゴリの出現頻度の違い

	同居経験あり		なし		p 値
	自己の高齢期				
積極的活動	9	(50.0)	14	(66.7)	.342
平静の活動	12	(66.7)	15	(71.4)	1.000
対人交流	7	(38.9)	8	(38.1)	1.000
健康行動	3	(16.7)	3	(14.3)	1.000
否定的	3	(16.7)	3	(14.3)	1.000
	一般の高齢者				
積極的活動	9	(64.3)	7	(43.8)	.043 *
平静の活動	7	(50.0)	18	(72.0)	.297
対人交流	3	(21.4)	7	(28.0)	.721
健康行動	4	(28.6)	8	(32.0)	1.000
否定的	1	(7.1)	4	(16.0)	.636

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

次に、高齢者との接触頻度について、それぞれのカテゴリを記述した人と記述していない人で高齢者との接触頻度が異なるか、各カテゴリの記述の有無を独立変数、接触頻度を従属変数としたt検定によって調べた（表5）。その結果、自己の高齢期について、否定的記述をしている人ほど高齢者との接触頻度が少ない傾向が10%水準で見られた。

偏見の研究では、一般に偏見の対象との接触頻度が多いほど偏見が弱くなることがわかっており（接触仮説; Allport, 1954）、エイジズムについても高齢者との接触頻度が少ないほどエイジズムが強いことが示されている（Allan & Johnson, 2008; 原田・杉澤・柴田, 2008）。高齢者の生活について否定的記述をした人ほど高齢者との接触頻度が少ないという本研究の結果は、この接触仮説に一致する結果である。しかし、一般的な高齢者についてはカテゴリの記述による接触頻度の違いはなかったことから、自分が高齢期になったときの生活に対して不安がある人が、日常生活において高齢者との接触を避けている可能性も考えられる。

表5 各カテゴリの記述の有無別、高齢者との接触頻度の平均値

	従属変数：高齢者との接触頻度		
	記述あり 記述なし		t値
	自己の高齢期		
積極的活動	4.78	4.33	0.59
平静的活動	4.92	3.92	1.29
対人交流	5.00	4.35	0.87
健康行動	5.67	4.41	1.26
否定的	3.00	4.85	1.75 †
	一般的高齢者		
積極的活動	3.44	3.74	0.41
平静的活動	3.32	4.14	1.11
対人交流	3.50	3.66	0.19
健康行動	3.33	3.74	0.52
否定的	3.20	3.68	0.44

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

カテゴリ間の関係

それぞれのカテゴリを記述した人が他のどのカテゴリ内容を一緒に記述していたかを調べるため、各カテゴリの組み合わせについて、共起頻度を調べた。具体的には、カテゴリの組み合わせごとに、記述の有無について2×2のクロス表を作成し（例えば「積極的活動の記述あり／なし」と「平静的活動の記述あり／なし」のクロス表）、双方に記述があるセルが有意に多い（あるいは少ない）かをFisherの直接確率検定を用いて検定した。結果を表6にまとめた。

自己の高齢期については、趣味などの積極的活動と昼寝などの平静的活動は一緒に記述されることが少なく、積極的活動と対人交流は一緒に記述されることが多かった。また、否定的な記述は、積極的活動や対人交流と一緒に記述されることが少ない傾向があった。一方、一般的な高齢者についても、自己の高齢期の記述と同様、積極的活動と平静的活動が一緒に記述されることは少なかった。また、積極的活動と健康行動が一緒に記述されることが多かった。

このことから、自己の高齢期を想像する際も、一般的な高齢者を想像する際も、趣味等の活動的な行動（積極的活動）をイメージす

表 6 各カテゴリの共起頻度

カテゴリ (全記述数)	他のカテゴリとの共起数			
	平穏的活動	対人交流	健康行動	否定的
自己の高齢期				
積極的活動 (23)	13 ▼	12 ▲	5	1 ▼
平穏的活動 (28)	—	10	4	4
対人交流 (15)	—	—	4	0 ▼
健康行動 (6)	—	—	—	0
否定的 (6)	—	—	—	—
一般的高齢者				
積極的活動 (16)	7 ▼	6	8 ▲	3
平穏的活動 (25)	—	5	7	2
対人交流 (10)	—	—	5	0
健康行動 (12)	—	—	—	2
否定的 (5)	—	—	—	—

Fisher の直接確率検定の結果、有意差があり、期待値より多かったものに▲、期待値より少なかったものに▼をつけた。また、10%水準で有意傾向がみられ、期待値より少なかったものに▽をつけた。

分析結果が重複する部分は「—」を記した。例えば「積極的活動」と「平穏的活動」の組み合わせと、「平穏的活動」と「積極的活動」の組み合わせの分析結果は同一であるため、「—」とした。

る人は、テレビや散歩、昼寝等ののんびりとした活動（平穏的活動）をイメージすることが少ないことがわかった。また、自己の高齢期を想像した際は、積極的な活動は家族や友人との対人的な交流と結びついてイメージされるのに対し、他者として高齢者を想像した際は積極的な活動と健康的な行動が結びついていることが示された。「元気な高齢者」として、自己の高齢期には「活動的で対人関係の豊かな姿」が、他者としての高齢者には「活動的で健康な姿」がイメージされるようである。これらはいずれもポジティブな高齢者像だが、対人関係の豊かさは本人にとってのメリットが大きく、一方、健康の維持は本人だけでなく周囲や社会にとってのメリットも大きい。そのため、他者としてのポジティブな高齢者像には、周囲にとって望ましい健康行動が結びついているのだと考えられる。

クラスター分析による回答者の分類：一般的高齢者

最後に、自己の高齢期と一般的高齢者のそれぞれについて、回答パターンの分類を行った。具体的には、5つの大カテゴリ（積極的活動、平穏的活動、対人交流、健康行動、否定的）のそれぞれについて、記述のあった人に1、記述のない人に0をコーディングし、これらの5変数を用いたクラスター分析を行って、回答者のパターンを明らかにした。初めに一般的高齢者についての結果を記述し、次に自己の高齢期についての結果を記述する。

一般的高齢者については、図1に示すような2つのクラスターに分けられた。第1クラスターは、積極的活動と対人交流の平均値が高い「アクティブ群」であった。このクラスターは16人（41.0%）の回答者が属した。第2クラスターは、平穏的活動の平均値が高い「非アクティブ群」で、23人（59.0%）の回答者が属した。大学生が一般的高齢者の生活を想像する際、趣味を行ったり家族や友人と交流する活動的な姿と、テレビを見たり昼寝をしたりするのんびりとした姿の2種類のイメージが存在することが示された。

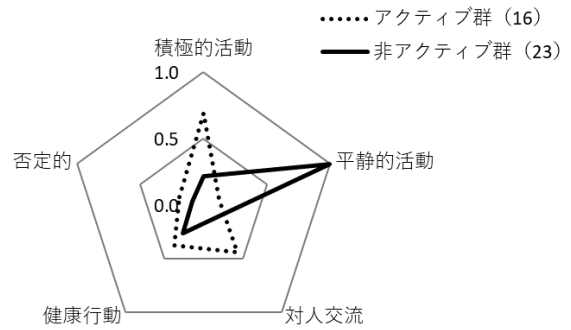


図1 一般的高齢者についての回答者のクラスター

一般的な高齢者のイメージは統一されたものではなく、散歩、テレビ、昼寝などの静かな生活を送る「非アクティブ」な姿が約6割、趣味や仕事、友人との交流等の活動で楽しむアクティブな高齢者の姿が約4割と、大きく2つに分かれた。このうち平穏的活動のみが頻出した非アクティブ群については、「活動性が低い」という典型的な高齢者ステレオタイプを反映していると言えるが、この群の記述には「のんびり」としているというポジティブな印象の記述も多く、必ずしも否定的な意味のみで記述されていたわけではなかった。本分析で表れた2つの高齢者の姿は、それぞれ、古典的な高齢者の適応理論における、高齢者が社会からゆっくりと離脱していくことで主観的幸福感が維持できると考える離脱理論 (Cumming & Henry, 1961) と、高齢期になっても中年期のような活動を維持していくべきだと考える活動理論 (Havighurst, 1961) に対応していると思われる。一般的高齢者の姿としてこの2つのイメージが提示されたのは納得のできる結果である。

一方で、「非活動的だがのんびり」という非アクティブ群の記述は相補的ステレオタイプとして働く可能性もある。先行研究では、高齢者に限らず多くの社会集団に対して「貧しいけど幸せ」「有能だが冷たい」といったポジティブ／ネガティブの両面を含むイメージが保有されていることが指摘されており、これらは相補的ステレオタイプと呼ばれる (Kay & Jost, 2003)。否定的なみの偏見に対する忌避感が広まった現代において、相補的なステレオタイプは現状の差別や格差を正当化し、維持する役割を果たしているとされる。エイジズムに関しても、相補的なエイジズムを測定する Ambivalent Ageism Scale が開発され、「高齢者は常に援助を提供されるべきだ」といった一見ポジティブな意見が、否定的なエイジズムと関連していることが示されている (Cary, Chasteen, & Remedios, 2017)。本研究で見られた「非活動的だがのんびり」という高齢者イメージも、相補的ステレオタイプとして高齢者に対する就労差別などを正当化している可能性がある。

クラスター分析による回答者の分類：自己の高齢期

自己の高齢期については、図2に示すような3つのクラスターに分けられた。第1クラスターは、積極的活動の平均値が高く、対人交流・健康行動・平穏的活動の平均値もやや高い「アクティブ群」で、22人（55.0%）の回答者が属した。第2クラスターは、否定的記述の平均値が高い「ネガティブ群」で、6人（15.0%）の回答者が属した。第3クラスターは、平穏的活動の平均値が高い「非アクティブ群」で、12人（30.0%）の回答者が属した。大学生が自己の高齢期の生

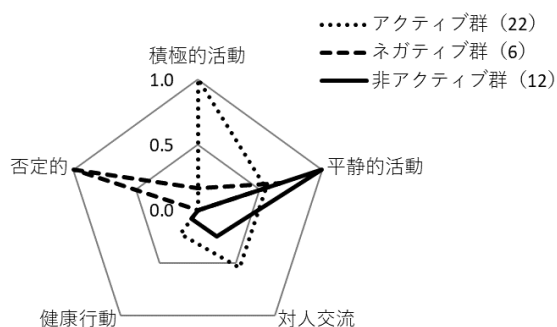


図2 自己の高齢期についての回答者のクラスター

活を想像する際、趣味を行ったり家族や友人と交流して健康的な生活を送る活動的な姿、テレビを見たり昼寝をしたりするのんびりとした姿、病気や死や退屈と結びついた否定的な姿の3種類のイメージが存在することが示された。

このうち、自己の高齢期の姿として最も多く記述されたのは活動的な姿であり、趣味、仕事、友人との交流、運動等の多様な活動で楽しむ高齢者の生活が描かれた。このような活動的な姿を記述した人は半数以上であり、大学生が自己の高齢期に持つイメージはポジティブなものが多いことがわかった。

一般的な高齢者では非アクティブ群が最も多かったことを考えると、自己の高齢期を想像する際のほうが、一般的な高齢者を想像する際より、活動的なイメージを持つ傾向があると言える。自己の高齢期を想像した際のほうが使用されている単語数が多かったこともこの結果に一致する。アクティブ群の軸となる積極的活動の記述には「趣味の〇〇をしている」と具体的な趣味内容を記載した回答も多く、自己の高齢期を想像した場合のほうが、現在の趣味や生活を高齢期にも続けている姿を想像しやすかったと考えられる。また、自己の高齢期には、活動的で対人関係の豊かな生活を送りたいという願望が反映されていることも考えられる。

また、自己の高齢期については、一般的な高齢者と異なり、否定的なイメージを記述した「否定群」が1つのクラスターとして独立した点が大きな特徴である。表2に示したように、否定的記述の記述数自体は自己の高齢期と一般の高齢者で差がなかったことから、自己の高齢期の記述で否定的記述が多かったというよりは、一般の高齢者の記述では積極的活動や平穏的活動とともに記述されていた否定的記述が、自己の高齢期の場合には他の記述とは別に、否定的記述のみで独立して記述される傾向があったと考えられる。他者として高齢者を見たときには、否定的な出来事（病気や退屈）は趣味や散歩等の日常的な行動と同様に客観的な事実として想像されたのに対し、自己の高齢期を考えた際には、加齢に伴って表れる病気や心理的喪失に不安を感じた人において、否定的記述として独立に表れたのだと解釈できる。「研究の背景と目的」で記したように、存在脅威管理理論や社会的アイデンティティ理論は、自分がいずれ高齢者になるという事実が老いや死に対する脅威を生じさせ、エイジズムを生じさせると論じている。本研究の結果、1割程度と少数ではあるが、これらの理論が予測したように自分が高齢者になると想像した際に強い不安を感じる大学生が存在することが示された。

総合考察

本研究では、自己の将来として高齢者の生活を想像した場合と、他者として一般的な高齢者の生活を想像した場合とで、想像される内容が異なるのか、質的分析によって検討した。

その結果、いずれの場合でも、趣味などの「積極的活動」、テレビや散歩などの「平穏的活動」、家族や友人との「対人交流」、運動や早寝早起きのような「健康行動」、病気や退屈などの「否定的」記述の5つのカテゴリが見出された。そして、自己の高齢期を想像した場合には子や孫との交流についてのイメージが多いが、一般的な高齢者の生活ではそのようなイメージがないことが示された。また、自己の高齢期を想像した際には積極的活動と対人交流が、一般的な高齢者を想像した際には積極的活動と健康行動と一緒に記述される傾向があった。これらの結果から、自己の高齢期については「活動的で対人関係の豊かな」イメージが、一般的な高齢者については「活動的で健康的な」イメージが、ポジティブな高齢者像としてイメージされていることが示された。

さらに、回答者のパターンとして、自己の高齢期については、趣味を行ったり家族や友人と交流して健康的な生活を送るアクティブな姿、テレビを見たり昼寝をしたりするのんびりとした非アクティブな姿、病気や死や退屈と結びついた否定的な姿の3種類のイメージが存在すること、一般的な高齢者については否定的な姿を除いて同様の2つのイメージが存在することが示された。自己の高齢期についてはアクティブな姿が、一般的な高齢者については非アクティブな姿が最も多く、自己の高齢期の姿は一般的な高齢者よりもより活動的で対人関係に富んだものとしてイメージされていることが明らかになった。

さらに、病気、死、退屈など的高齢者に対する否定的な記述も見られた。このような否定的記述は少数であったが、高齢者との接触頻度が低い人に多い傾向があった。否定的な記述は自己の高齢期と一般の高齢者の記述で同数程度見られたが、否定的な記述のみを行った人のカテゴリが抽出されたのは自己の高齢期のみであった。これは、存在脅威管理理論や社会的アイデンティティ理論に基づく先行研究で示されたように、自己の将来として高齢者を見ることで、老いや死に対する脅威が生じたためだと考えられる。他者として高齢者を見た際には、高齢期の病気や精神的暗さを、趣味や仕事等の積極的な活動とも両立し得る日常的变化の1つととらえていたのに対し、自己の将来として高齢期を見た際は、そのような否定的な変化は老いに対する不安を生じさせ、積極的活動やのんびりとした平穏的活動とは両立し得ないネガティブなイメージとして表れたのだと推測できる。

以上の結果からは、自己の将来として高齢者を見た際、他者としての高齢者を見た時と比べて、基本的にはポジティブなイメージが持たれること、しかし、一部の人には病気や精神的暗さに基づいた老いの不安が生じることが示された。Packer and Chasteen (2006)の研究では、若者集団同一視が強い人と弱い人で、高齢者になった自己を想像することの影響が異なることが示されていた。本研究の結果も、アクティブ群、非アクティブ群、ネガティブ群に分類されたのがそれぞれどのような人であったのか、特にネガティブ群の回答者にはどのような特徴があるのか、今後検討する必要があるだろう。

本研究の限界として、以下の3点が挙げられる。第1に、本研究

は70歳の高齢者についてのイメージを調べたものであり、比較的健康な前期高齢者についての研究であるという点である。「高齢者」の年齢幅は広く、本研究で得られた結果が高齢者全体のイメージとは言いがたい。特に75歳上の後期高齢者に対しては本研究結果が当てはまらない可能性がある。

第2に、自己の高齢期を想像した課題において、回答者の現在の生活や現在の生活における嗜好性が反映された可能性が高いという点である。例えば、現在の時点で、特に趣味を持たず、テレビを見たり昼寝をしたりといった非アクティブな活動を好む回答者もいると考えられる。この場合、高齢期を想像したために非アクティブな生活を記述したのか、現在の生活の延長として非アクティブな生活を記述したのかが不明である。本研究では、大学の授業終了後に教室にて調査を行ったため、基本的には大学に通うという積極的活動を行っている回答者だと推測し、非アクティブな行動のみだった記述は、現在の生活の延長とは考えなかった。しかし、「高齢期だからこそ」非アクティブな記述をした人は、今回の分析結果における「非アクティブ群」の割合よりも少ない可能性が高いことを考慮する必要がある。

第3に、本研究では、非アクティブな姿として記述された「活動的ではないけどのんびり」というイメージが、相補的ステレオタイプの反映である可能性を指摘したが、実証には至らなかった。このような相補的ステレオタイプは現状の社会システムや差別を正当化し維持する役割を果たすことが指摘されている (Kay & Jost, 2003)。本研究で見られた「活動的ではないけどのんびり」という高齢者イメージがこのようなシステム正当化の役割を果たすのか、今後の実証を行いたい。

今後ますますの高齢化が予測される我が国において、エイジズムは重要な課題である。本研究結果に基づき、自分が高齢者になるという特徴がエイジズムにどのような影響を与えるのか、さらなる研究が必要である。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP18J12472 の助成を受けたものです。

引用文献

- Abrams, D., Swift, H. J., & Drury, L. (2016). Old and unemployable? How age-based stereotypes affect willingness to hire job candidates. *Journal of Social Issues*, 72, 105–121.
- Akiyama, H., Sugawara, I., Takeuchi, M. & Kobayashi, E. (2008, November). *Men and women's resilience in health trajectories over 20 years in Japan*. Paper presented at 61st Annual meeting of Gerontological Society of America, National Harbor, America.
- Allan, L. J., & Johnson, J. A. (2008). Undergraduate attitudes toward the elderly: The role of knowledge, contact and aging anxiety. *Educational Gerontology*, 35, 1–14.
- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- 馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明 (1993). 中学生の老年

- 観—老人観スケールによる測定—. *社会老年学*, 38, 3-12.
- Brewer, M. B., Dull, V., & Lui, L. (1981). Perceptions of the elderly: Stereotypes as prototypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 656-670.
- Butler, R. (1969). Ageism: Another form of bigotry. *The Gerontologist*, 9, 243-246.
- Caporael, L. (1981). The paralanguage of caregiving: Baby talk to the institutionalized aged. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 876–884.
- Cary, L. A., Chasteen, A. L., & Remedios, J. (2017). The ambivalent ageism scale: Developing and validating a scale to measure benevolent and hostile ageism. *The Gerontologist*, 57(2), e27–e36.
- Cuddy, A. J. C., & Fiske, S. T. (2002). Doddering but dear: Process, content, and function in stereotyping of older persons. In T. D. Nelson (Ed.), *Ageism: Stereotyping and prejudice against older persons* (pp.3-26). Cambridge, MA: MIT Press.
- Cumming, E., & Henry, W. E. (1961). *Growing old: The process if disengagement*. New York: Basic Books.
- Devine (1989). Stereotype and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 5-18.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The cause and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self* (pp.189-212). New York: Springer-Verlag.
- 原田謙・杉澤秀博・柴田博 (2008) 都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因 *老年社会科学*, 29, 485-492.
- Havighurst, R. J. (1961). Successful Aging. *The Gerontologist*, 1, 8-13.
- 保坂久美子・袖井孝子 (1988) 大学生の老人イメージ—SD法による分析 *社会老年学*, 27, 22-33.
- Hummert, M. L. (1990). Multiple stereotypes of elderly and young adults: A comparison of structure and evaluations. *Psychology and Aging*, 5, 182-193.
- Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of “poor but happy” and “poor but honest” stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.
- Kite, M. E., Stockdale, G. D., Whitley, Jr. B. E., & Johnson, B. T. (2005). Attitudes toward younger and older adults: An updated meta-analytic review. *Journal of Social Issues*, 61, 241-266.
- 小林江里香・深谷太郎 (2015). 日本の高齢者における社会的孤立割合の変化と関連要因—1987年、1999年、2012年の3念国調査の結果より— *社会福祉学*, 56(2), 88-100.
- 厚生労働省 (2020) 令和元年簡易生命表.
- Levy, B. (2009). Stereotype embodiment: A psychosocial approach to aging. *Current directions in psychological science*, 18, 332-336.
- Levy, B., Zonderman, A. B., Martin, D., Slade, M. D., & Ferrucci, L.

- (2009). Age stereotypes held earlier in life predict cardiovascular events in later life. *Psychological Science*, 20, 296-298.
- Levy, B., Zonderman, A. B., Slade, M. D., & Ferrucci, L. (2011). Memory shaped by age
- Liden, R. C., Stilwell, D., & Ferris, G. R. (1996). The effects of supervisor and subordinate age on objective performance and subjective performance ratings. *Human Relations*, 49, 327-347.
- Martens, A., Greenberg, J., Schimel, J., & Landau, M. J. (2004). Ageism and death: Effects of mortality salience and perceived similarity to elders on reactions to elderly people. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 1524-1536.
- Menkin, J. A., Robles, T. F., Gruenewald, T. L., Tanner, E. K., & Seeman, T. E. (2017). Positive expectations regarding aging linked to more new friends in later life. *The Journals of Gerontology, Series B*, 72, 771-781.
- 内閣府 (2015) 平成 26 年度高齢者の日常生活に関する意識調査 .
- 内閣府 (2020) 令和 2 年版高齢社会白書 .
- 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井由里子 (1999). 看護学生の老人のイメージに関する研究 - SD 法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に - . 老年看護学, 4, 98-104.
- Packer, D. J., & Chasteen, A. L. (2006). Looking to the future: How possible aged selves influence prejudice toward older adults. *Social Cognition*, 24, 218-247.
- Palmore, E. B. (1999). *Ageism: Negative and positive (2nd ed.)* New York: Springer. 鈴木研一 (訳) (2002) エイジズム: 高齢者差別の実相と克服の展望 明石書店, 東京.
- Robinson & Ryff (1999) The role of self-deception in perceptions of past, present, and future happiness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 595-606.
- Rosencrantz, H. A., & McNevin, T. E. (1969). A factor analysis of attitudes toward the aged. *The Gerontologist*, 9, 55-59.
- Rowe, J. W., & Kahn, R. L. (1997). Successful aging. *The Gerontologist*, 37, 433-440.
- Rupp, D. E., Vodanovich, S. J., & Credé, M. (2006). Age bias in the workplace: The impact of ageism and causal attributions. *Journal of Applied Social Psychology*, 36, 1337-1364.
- 斉藤雅茂・冷水豊・山口麻衣・武居幸子 (2009). 大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴. 社会福祉学, 50 (1), 110-122.
- Schmidt, D. F., & Boland, S. M. (1986). Structure of perceptions of older adults: Evidence for multiple stereotypes. *Psychology and Aging*, 1(3), 255-260.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel & W. G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations* (pp.7-24), Chicago: Nelson-Hall.
- 高橋一公 (2007). 大学生の一般的老人イメージと将来の自己老人イメージ - 老人観スケールを用いた分析 - . 美延山大学仏教学部紀要, 8, 133-146.
- 高橋一公 (2012). 将来像としての「老人観」の測定 (1) - 一般的老人イメージの SD 法とテキストマイニングによる分析を通して - . 東京未来大学紀要, 5, 61-72.
- 高橋一公 (2013). 大学生の老人イメージ測定の試み - 自己老人イメージの SD 法とテキストマイニングによる分析を通して - . 東京未来大学紀要, 6, 85-94.
- 竹内真純・唐沢かおり (2008). セクシズム・エイジズムが就労格差の帰属および是正策への態度に与える効果. 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 74-75.